

上越教育大学研究紀要 第41巻第1号 令和3年8月31日
Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 41(1), Aug. 31, 2021

高校運動部における体罰及び不適切指導が精神的回復力に及ぼす影響

豊田 隼*・山田 智之**・飯塚 駿***・遠藤 俊郎***

(令和3年1月29日受付；令和3年5月14日受理)

要 旨

運動部における指導者の体罰や不適切指導は根深い社会問題である。本研究は、大学生を対象として調査を実施し、高校運動部における体罰及び不適切指導に関する実態を回顧調査によって把握するとともに、被体罰経験及び被不適切指導経験と体罰に対する是非意識が精神的回復力に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。その結果、被体罰経験率は27.1%、被不適切指導経験率は20.6%、両被経験率は13.5%と危機的な実態を示唆し、体罰に対して肯定的意識を持つ者は18.1%、内被体罰経験者は10.3%、被不適切指導経験者は7.7%という結果が得られた。被体罰経験群及び被不適切指導経験群、体罰肯定群を独立変数、精神的回復力の各下位尺度を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析の結果、被不適切指導経験群は肯定的な未来志向に有意な負の影響を与えていたことから、不適切指導が及ぼす心理的影響の一端が示唆された。また、体罰肯定群は感情調整に有意な負の影響を与えていたことから、体罰に対する肯定的意識と精神的回復力との関連が明らかとなり、体罰及び不適切指導の再生産性を助長する可能性が示唆された。

KEY WORDS

corporal punishment 体罰, inappropriate coaching 不適切指導, harassment ハラスメント, resilience 精神的回復力

1 問題の所在

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を直前に控える今日、日本の学校運動部活動（以下、運動部と略す）は、あらゆるスポーツの文化的価値の汎用に寄与し、「世界に類をみないすぐれた日本型スポーツ教育システム（友添，2016，p.3）」として重要な位置付けがなされてきた。学校教育における生徒の人格形成・人間性の陶冶に伴う自発性や責任感，対人関係スキルや社会形成能力といった心理社会的スキルを養う場として中核的機能を果たしており，その教育的意義は大きい。今宿・朝倉・作野・嶋崎（2019）は，運動部の効果を包括的に整理しており，運動部の効果研究の変遷を辿ると，身体的・心理的・社会的効果，学校生活への効果やスポーツ活動の継続性への効果等，多様な効果が実証されていることに言及し，近年では，ストレスマネジメントやコミュニケーションスキルといった心理社会的発達に関する運動部の効果研究が顕著に多いことを指摘している（今宿他，2019）。また，運動部が学校への心理社会的適応とポジティブな関係性にあることも示唆されている（藤後・井梅・大橋，2015）。第2期スポーツ基本計画におけるスポーツ参画人口の拡大やスポーツの価値的側面の具現化を目指した一億総スポーツ社会の実現に向け（文部科学省，2017），今後運動部に向けた社会的期待は，より大きなものになると考えられる。

他方，運動部における負の側面として，指導者による体罰及びパワー・ハラスメント等の不適切指導が挙げられ，これらは依然として根深い社会問題である。運動部における体罰のこれまでの変遷を概観すると，2012年の大阪市立高校バスケットボール部で発生した自殺事案や2013年の女子柔道ナショナルチーム監督の暴力行為等が契機となり，体罰に対する社会的認識及び批判的風潮は強まることとなった。言うまでもなく体罰は，学校教育法第11条で明確に禁止されている非倫理的行為であり，Global Initiative to End All Corporal Punishment of Children（2016）の評論では，体罰が短期的及び長期的に被害者の心身の健康に悪影響を及ぼし，有益である証拠が無いことを250カ国以上の研究を根拠に示唆している。昨今では，国際人権団体HUMAN RIGHTS WATCH（2020）の報告書（以下，HRW（2020）と略す）による問題提起を皮切りに，スポーツ界及び教育界では体罰に対して改めて注目が集まっているが，日本の至近の事例として，兵庫県某市立中学校柔道部での顧問による傷害事件（産経新聞，2020）や岡山県某私立中学・高等学校卓球部での顧問による体罰・暴言行為（山陽新聞，2020）などが挙げられるように，体罰根絶とは未だ言い難い現状である。平田・小松（2017）によると，被体罰経験率は過去の先行調査と比較すると減少傾向ではあるものの，一定水準で発生し続けている実態を示唆しており，併せて，近年の体罰低下傾向という社会的認識故の

*上越教育大学（専門職学位課程） **学校教育学系 ***山梨学院大学

社会的望ましきバイアスが介在し、実態把握に係る回答を抑制している可能性に言及している。内田・寺口・大工(2020)は、被体罰経験が体罰への容認的態度に体罰効果性認知を媒介として影響を及ぼすことを明らかにしている。こうした被体罰経験に係る実態とそれが及ぼす負の影響に関する各種研究の現状から、体罰の実態把握に関する継続的調査を必要視する指摘(阿江, 2019; 宮坂・藤田・市川, 2018; 佐々木, 2015)を踏まえ、本研究でも被体罰経験に係る実態を捉えることは変遷を把握する素地をつくる点で意義を持つと考えられる。また、運動部に関わる非倫理的行為は、身体的暴力である体罰だけではない。「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」(日本体育協会・日本オリンピック委員会・日本障害者スポーツ連盟・全国高等学校体育連盟・日本中学校体育連盟, 2013)をはじめ、体罰根絶に関する様々な取り組みがなされ、あらゆるスポーツ指導が以前より厳密に注視される背景の中で、パワー・ハラスメントやセクシャル・ハラスメントといった精神的苦痛を伴う不適切指導は依然として蔓延している。包括的データの欠如が課題であるものの(HRW, 2020)、体罰に関する実態・意識把握は比較的多く研究がされてきたが、精神的苦痛を伴う不適切指導の実態・意識把握に焦点を当てた調査研究は乏しい。そこで、運動部における被体罰経験に関する回顧的実態に加え、被不適切指導経験の実態も併せて把握することは、包括的資料の定量化に資する点で意義を持つと考えられる。

被体罰経験や被不適切指導経験に関する事後意識やそれに伴う是非意識について、全国大学体育連合(2014)の調査(以下、大体連(2014)と略す)では、体罰に対する是非意識として体罰を必要視する者の割合は40.9%存在しており、体罰を受けたその後の意識として「精神的に強くなった」への回答が58.4%と肯定的な意見が約6割を占めていた。また、平田・小松(2017)によると、調査実施時に体罰を肯定的に評価していた者の割合は51.8%であったことを示唆し、これまでの調査研究を概観して相対的に被体罰経験者の方が未経験者よりも体罰を肯定視している実態を示唆している。さらに、不適切指導に準ずる指導者の統制的行動に焦点を当てた戸山・松本・渋谷・幸野(2020)の研究によると、スポーツ指導者による威嚇や過度の個人統制を与えられているという認知が選手の基本的心理欲求の不满を高めていると言及している。加えて、体罰の発生要因や体罰受容の心理的メカニズム等、理論的側面から考察している研究も見られ(松田, 2016; 大峰, 2016; 坂本, 2011)、こうした諸理論や意識評価に着目した研究は比較的多いが、実際に体罰を肯定視する者の意識が当人の心理的特性にどう響いているのか、高校運動部における被体罰経験や被不適切指導経験が当人の現在の精神にどのような心理的影響を及ぼしているのかは明らかにされておらず、不透明な部分が多い。

ところで、過去の被体罰経験や被不適切指導経験を回避が困難な出来事として捉えた場合に、そうした被経験が及ぼす心理的影響や対象とする意識特性を測る中で、現在の個人の精神的側面を反映する概念の一つとしてレジリエンス(Resilience)がある。そもそもレジリエンスとは、「逆境、悲劇、脅威、あるいは人間関係の問題、深刻な健康問題等の重大かつ困難なストレス源に直面しても、うまく適応できるプロセスや結果」(American Psychological Association, 2012)と定義され、レジリエンス研究の報告は1970年代から始まり、日本では1990年代から報告が始められたとされている(佐藤・金井, 2017)。小塩・中谷・長峰(2002)は、どのような心理的特性がレジリエンス状態を導き出すのかという観点に着目した検討を行い、「レジリエンスの状態に結び付きやすい心理的特性」を精神的回復力と命名した。3因子構造(新奇性追求、感情調整、肯定的な未来志向)の精神的回復力は、自尊心と有意な関連があり、出来事の生起に関わらず、かつ常に有効な予防要因として機能しているわけではないが、個人が危機に陥った状況下において重要な役割を担う個人に備わる心理的特性であるとされる(小塩他, 2002)。これに関連して、日本における運動部とレジリエンス、特に精神的回復力に関する研究も幾つか行われている。上野(2013)は、高校運動部員の心理的スキルと精神的回復力との関係について運動部と学校生活の両面から検討している。その結果、対人スキルを獲得している運動部員は、活動場面及び学校生活場面の両場面において全ての側面の精神的回復力が高く、個人的スキルを獲得している運動部員は、新奇性追求及び感情調整得点が高い状態であったことが示唆され、心理的スキルを獲得している運動部員と精神的回復力との正の関連を明らかにしている。また、葛西・石川(2014)は高校運動部における活動有無、スポーツ成長感及び認知とレジリエンスとの関連について検証している。小塩他(2002)の尺度構成とは若干異なるが、将来展望と自信及び新奇性追求に関して、運動部所属の者の方が文化部及び無所属の者よりも得点が高く、運動部で獲得された自己成長感を認知することとの関連が明らかにされている。これらの結果は、運動部における正の影響として一定の示唆であると判断できる。その一方で、上述したように指導者による体罰及び不適切指導に関する負の側面から実証的に検討した研究は見当たらず、依然として不明瞭なままである。こうした概観から、運動部における負の功罪を焦点的に評価する一手段として、精神的回復力という心理的特性から検証することで、体罰及び不適切指導、体罰に対する意識が及ぼす多義的影響の一端を明らかにできると考えられる。

そこで本研究は、大学生を対象とした調査を通じて、高校運動部における被体罰経験及び被不適切指導経験に関す

る回顧的実態を把握するとともに、被体罰経験及び被不適切指導経験と体罰に対する是非意識が精神的回復力に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。なお、本研究では体罰を「殴る、蹴る等の直接的・間接的な肉体的苦痛を伴う傷害行為、危険な暴力行為（東京都教育委員会、2019）」、不適切指導を「(1)限度を超えた肉体的・精神的負荷を課す発言や行為、(2)パワー・ハラスメント等の脅し、威圧・威嚇の発言や行為、(3)セクシャル・ハラスメントに係る発言や行為、(4)身体や容姿、人格否定に係る発言や行為（スポーツ庁、2018）」として操作的に定義し検討することとした。

2 方法

2.1 調査対象と調査方法

2020年11月下旬に大学生を対象としたサーベイ調査を実施した。具体的には、各該当講義の担当教員に調査実施の承諾を得た後、講義時間内及び前後の時間にREAS（リアルタイム評価支援システム）を使用したWEB調査を行った。調査の配布は、本研究者が用意したQRコード及びURLを介して実施され、本研究の趣旨説明及び留意事項をMicrosoft PowerPoint 2019で作成した概要スライドに記載した。計4講義（キャリア教育系1講義・スポーツ心理学3講義）での調査の結果、得られた総回答数は199名であった。分析対象として、回答漏れ等を除いた計155名（平均年齢19.94歳；SD=1.168；高校運動部所属率100%）を有効回答数とした（有効回答率77.9%）。なお、調査対象者の基本的属性をTable1に示した。

Table1 調査対象者の基本的属性

		<i>n</i>	%
性別	男性	91	58.7
	女性	64	41.3
	第3の性	0	0.0
	その他	0	0.0
組織内役職	部長	45	29.0
	副部長	27	17.4
	部員	80	51.6
	主務・マネージャー	3	1.9
最高成績	国際大会レベル	7	4.5
	全国大会レベル	68	43.9
	地方大会レベル	30	19.4
	都道府県大会レベル	41	26.5
	市区町村大会レベル	9	5.8
教員志望	志望群	58	37.4
	中間群	26	16.8
	未志望群	71	45.8
指導者志望	志望群	76	49.0
	中間群	42	27.1
	未志望群	37	23.9
合計		155	100.0

2.2 調査の手続き

2.2.1 調査内容と倫理的配慮

本調査は、調査対象者の基本的属性と特徴に関する9項目、体罰の実態及び意識に関する11項目、不適切指導の実態及び意識に関する14項目の他に、下記に示す小塩他（2002）の精神的回復力尺度21項目から構成された（一部質問項目及び精神的回復力尺度項目についてはAPPENDIXを参照）。回答方法は選択肢方式で求め、無記名で実施された。回答抑制のバイアスを考慮し、回答内容は講義の成績に一切無関係である点、調査で知り得た個人情報には守秘し、データは研究活動以外では使用しない点、調査協力が得られない場合は回答を強制しない点を説明文に明記し、インフォームドコンセントに留意して実施した。また、回顧調査における想起の限界を考慮し、本研究では調査対象者の記憶に比較的新しいと予想される高等学校期に回想場面を限定して尋ねた。そして、体罰及び不適切指導の定義は、その多義性から行使者及び被体罰経験者、未経験者によって多様な評価が存在する点を考慮し、本研究での体罰及び不適切指導の操作的定義を調査内冒頭文及び質問内の説明文に明記し、調査対象者の共通認識性を確保した。なお、得られた調査データの統計解析には、IBM SPSS Statistics 27, JASP version 0.14を用い、統計的有意水準は5%とした。

2.2.2 精神的回復力尺度（Adolescent Resilience Scale；ARS）

調査対象者のレジリエンスに係る心理的特性の測定手法として、小塩他（2002）の精神的回復力尺度を用いた。精神的回復力尺度は、3つの下位尺度から構成され、質問項目は計21項目である。各下位尺度は、「困難があっても、それは人生にとって価値のあるものだと思う（新奇性追求：7項目）」、「自分の感情をコントロールできる方だ（感情調整：9項目）」、「将来の見通しは明るいと思う（肯定的な未来志向：5項目）」などの質問で構成されている。なお、回答は小塩他（2002）に倣い、1（いいえ）から5（はい）までの5件法で実施し、逆転項目の処理を行った後に得点を算出した（いいえ1点；どちらかと言うといいえ2点；どちらでもない3点；どちらかと言うとはい4点；はい5点）。本研究の分析には、各下位尺度の質問項目に対する回答の素点合計値を用いた。

3 結果

3.1 尺度の検討

本調査で用いた精神的回復力尺度（小塩他，2002）は，3つの下位因子から成る尺度であることから，得られた調査データに関して，該当する質問の逆転項目処理を行った後，固有値 ≥ 1.0 を基準とした最尤法プロマックス回転による確認的因子分析を行った。その結果，小塩他（2002）とほぼ同様の3因子構造が得られ，Cronbachの α 係数を算出したところ，尺度全体としての精神的回復力は $\alpha = .849$ ，第1因子の新奇性追求は $\alpha = .723$ ，第2因子の感情調整は $\alpha = .714$ ，第3因子の肯定的な未来志向は $\alpha = .834$ となり概ね使用可能な内部一貫性を有し，再現性は確保されたと判断できた。なお，各因子における記述統計量をTable2に示した。

Table2 精神的回復力尺度の記述統計量

	<i>n</i>	平均値	標準偏差	最小値	最大値	歪度	尖度
精神的回復力	155	78.96	11.250	49	100	-0.206	-0.684
新奇性追求	155	27.67	4.172	18	35	-0.309	-0.770
感情調整	155	30.94	5.904	16	45	-0.002	-0.486
肯定的な未来志向	155	20.35	3.837	9	25	-0.805	-0.087

3.2 体罰及び不適切指導に関する実態

まず，高校運動部における被体罰経験と被不適切指導経験との連関を検証するため χ^2 検定を行った。分析の結果（Table3），両被経験間の人数の偏りは非常に有意であり（ $\chi^2(1) = 30.302$, $p < .001$, $\phi = .442$ ），効果量（*Phi-coefficient*）から中程度の連関と判断できた。少しでも被経験があると報告した調査対象者の割合として，体罰と不適切指導を両方経験している者は13.5%，体罰のみ経験している者は27.1%，不適切指導のみ経験している者は20.6%存在していたことが明らかとなり，被体罰経験者の方が被不適切指導経験者よりも有意に多かった。なお，被不適切指導経験の具体的内容として，調査対象者全体における被経験割合は，「限度を超えた肉体的・精神的負荷を課す発言や行為」で14.8%，「パワー・ハラスメント等の脅し，威圧・威嚇の発言や行為」で17.4%，「セクシャル・ハラスメントに係る発言や行為」で9.0%，「身体や容姿，人格否定に係る発言や行為」で16.1%であった。併せて，被体罰経験及び被不適切指導経験と体罰是非意識との連関を検討するため χ^2 検定を行った。分析の結果（Table4，5），被体罰経験と体罰是非意識における人数の偏りは非常に有意であり（ $\chi^2(1) = 15.617$, $p < .001$, $\phi = .317$ ），効果量（*Phi-coefficient*）から中程度の連関と判断できた。また，被不適切指導経験との連関に関しても偏りは非常に有意であり（ $\chi^2(1) = 10.291$, $p < .001$, $\phi = .258$ ），効果量（*Phi-coefficient*）からは小さい連関と判断できた。体罰に対して肯定的意識を持つ者は18.1%であり，うち被体罰経験者は10.3%，同様に被不適切指導経験者は7.7%であった。

Table3 被体罰経験と被不適切指導経験との連関

被体罰経験	被不適切指導経験		合計
	経験群	未経験群	
経験群	21 (13.5)	21 (13.5)	42 (27.1)
調整済残差	5.5***	-5.5***	
未経験群	11 (7.1)	102 (65.8)	113 (72.9)
調整済残差	-5.5***	5.5***	
合計	32 (20.6)	123 (79.4)	155 (100.0)

Notes. *n* (%), *** $p < .001$, *Phi-coefficient* = .442

Table4 被体罰経験と体罰是非意識との連関

被体罰経験	体罰是非意識		合計
	肯定群	否定群	
経験群	16 (10.3)	26 (16.8)	42 (27.1)
調整済残差	4.0***	-4.0***	
未経験群	12 (7.7)	101 (65.2)	113 (72.9)
調整済残差	-4.0***	4.0***	
合計	28 (18.1)	127 (81.9)	155 (100.0)

Notes. *n* (%), *** $p < .001$, *Phi-coefficient* = .317

Table5 被不適切指導経験と体罰是非意識との連関

被不適切指導経験	体罰是非意識		合計
	肯定群	否定群	
経験群	12 (7.7)	20 (12.9)	32 (20.6)
調整済残差	3.2***	-3.2***	
未経験群	16 (10.3)	107 (69.0)	123 (79.4)
調整済残差	-3.2***	3.2***	
合計	28 (18.1)	127 (81.9)	155 (100.0)

Notes. *n* (%), *** $p < .001$, *Phi-coefficient* = .258

続いて，体罰に関する意識の実態を把握する資料として，調査対象者の被体罰経験及び被不適切指導経験に対する事後意識と当該指導者の現在の評価に関する集計結果をTable6に示した。事後意識において，被体罰経験では「技術が向上した」中間群（64.3%）が最も多く，次いで「精神的に強くなった」高群（59.5%）と「反抗心を持った」

高群（59.5％）が多かった。被不適切指導経験では「反抗心を持った」高群（71.9％）が最も多く、次いで「精神的に強くなった」高群（65.6％）が多かった。体罰及び不適切指導を行使した指導者に対する現在の評価に関しては、ポジティブに捉えている被体罰経験者は38.1％、被不適切指導経験者25.0％であった。なお、事後意識項目は大体連（2014）を参考とし、意識の実態に関する基礎集計に際しては、有効回答数の平均値の観点から3群間に統一して分類化した。

Table6 被体罰経験及び被不適切指導経験に関する意識

被経験に対する事後意識	被体罰経験 <i>n</i> = 42			被不適切指導経験 <i>n</i> = 32		
	高群	中間群	低群	高群	中間群	低群
精神的に強くなった	25 (59.5)	12 (28.6)	5 (11.9)	21 (65.6)	5 (15.6)	6 (18.8)
技術が向上した	5 (11.9)	27 (64.3)	10 (23.8)	6 (18.8)	11 (34.4)	15 (46.9)
指導者の気持ちが分かった	13 (31.0)	17 (40.5)	12 (28.6)	8 (25.0)	7 (21.9)	17 (53.1)
プレーが萎縮した	18 (42.9)	13 (31.0)	11 (26.2)	15 (46.9)	8 (25.0)	9 (28.1)
不安に感じた	17 (40.5)	15 (35.7)	10 (23.8)	12 (37.5)	9 (28.1)	11 (34.4)
試合に勝てるようになった	12 (28.6)	18 (42.9)	12 (28.6)	5 (15.6)	12 (37.5)	15 (46.9)
反抗心を持った	25 (59.5)	13 (31.0)	3 (7.1)	23 (71.9)	6 (18.8)	3 (9.4)
当該指導者に対する現在の評価	ポジティブ群	ニュートラル群	ネガティブ群	ポジティブ群	ニュートラル群	ネガティブ群
	16 (38.1)	11 (26.2)	15 (35.7)	8 (25.0)	12 (37.5)	12 (37.5)

Notes. *n* (%)

3. 3 体罰及び不適切指導が精神的回復力に及ぼす影響

まず、高校運動部における被体罰経験及び被不適切指導経験、調査対象者の体罰に対する是非意識と精神的回復力における下位尺度との各差を比較するため、独立サンプルの t 検定を行った。その結果（Table7）、被体罰経験との比較では、感情調整においてのみ有意な差が見られ（ $t(153) = -1.995$, $p < .05$, $d = -.361$, 95% $CI [-.716, -.003]$ ）、効果量（Cohen's- d ）から小程度の差と判断できた。被不適切指導経験との比較では、新奇性追求において傾向（ $t(153) = -1.746$, $p < .10$, $d = -.347$, 95% $CI [-.737, +.045]$ ）、感情調整及び肯定的な未来志向において有意な差が見られた（感情調整： $t(153) = -2.077$, $p < .05$, $d = -.412$, 95% $CI [-.803, -.020]$ ；肯定的な未来志向： $t(153) = -2.046$, $p < .05$, $d = -.406$, 95% $CI [-.797, -.014]$ ）。効果量（Cohen's- d ）からは感情調整得点で小程度、肯定的な未来志向得点で小程度の差と判断できた。体罰は是非意識との比較では、感情調整においてのみ非常に有意な差が見られ（ $t(153) = -2.532$, $p < .01$, $d = -.529$, 95% $CI [-.941, -.114]$ ）、効果量（Cohen's- d ）から中程度の差と判断できた。

Table7 被経験及び是非意識による各下位尺度との比較

下位尺度	被体罰経験		<i>t</i>	<i>d</i>	被不適切指導経験		<i>t</i>	<i>d</i>	体罰是非意識		<i>t</i>	<i>d</i>
	被経験群 <i>n</i> = 42	未経験群 <i>n</i> = 113			被経験群 <i>n</i> = 32	未経験群 <i>n</i> = 123			肯定群 <i>n</i> = 28	否定群 <i>n</i> = 127		
新奇性追求	26.98(4.30)	27.93(4.11)	-1.267 <i>ns</i>	-.229	26.53(3.76)	27.97(4.24)	-1.746 †	-.347	27.18(4.47)	27.78(4.11)	-.689 <i>ns</i>	-.144
感情調整	29.40(5.82)	31.51(5.86)	-1.995 *	-.361	29.03(5.86)	31.44(5.84)	-2.077 *	-.412	28.43(5.62)	31.50(5.84)	-2.532 **	-.529
肯定的な未来志向	20.12(3.95)	20.43(3.81)	-.453 <i>ns</i>	-.082	19.13(4.38)	20.67(3.64)	-2.046 *	-.406	20.39(3.68)	20.34(3.89)	.068 <i>ns</i>	-.014

Notes. *M* (*SD*), † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

続いて、高校運動部における被体罰経験及び被不適切指導経験、調査対象者の体罰に対する是非意識が精神的回復力に及ぼす影響を検証するため、被体罰経験群（ $n = 42$ ）、被不適切指導経験群（ $n = 32$ ）、体罰肯定群（ $n = 28$ ）の3つのダミー変数を独立変数、精神的回復力の3因子の下位尺度（新奇性追求、感情調整、肯定的な未来志向）を従属変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った。分析の結果、第一に被体罰経験群では、統計的に有意な影響は判定できなかった。第二に被不適切指導経験群では、Table8に示す通り、肯定的な未来志向において分散分析 F 値が有意であった（ $F(1,154) = 4.184$, $p < .05$ ）。重回帰分析の結果、効果量（ R -squared）から小程度の予測と判断されるが、被不適切指導経験群は肯定的な未来志向に有意な負の影響を与えていた（ $\beta = -.163$, $p < .05$ ）。第三に体罰肯定群では、Table9に示す通り、感情調整において分散分析 F 値が有意であった（ $F(1,154) = 6.410$, $p < .05$ ）。重回帰分析の結果、効果量（ R -squared）から小程度の予測と判断されるが、体罰肯定群は感情調整に有意な負の影響を与えていた（ $\beta = -.201$, $p < .05$ ）。

Table8 被不適切指導経験が精神的回復力に及ぼす影響

従属変数	精神的回復力	
	肯定的な未来志向	
ANOVA	<i>F</i>	<i>p</i>
	4.184 *	.043
<i>R</i> ²	.027	
独立変数	標準化偏回帰係数	
	β	<i>p</i>
被不適切指導経験群	-.163 *	.043

Notes. **p* < .05, *B* = -1.542, *SEB* = .754

Table9 体罰是非意識が精神的回復力に及ぼす影響

従属変数	精神的回復力	
	感情調整	
ANOVA	<i>F</i>	<i>p</i>
	6.410 *	.012
<i>R</i> ²	.040	
独立変数	標準化偏回帰係数	
	β	<i>p</i>
体罰肯定群	-.201 *	.012

Notes. **p* < .05, *B* = -3.067, *SEB* = 1.212

4 考察

4.1 体罰及び不適切指導に関する実態

本研究における調査対象者の高校運動部での被体罰経験率は27.1%, 被不適切指導経験率は20.6%であり, 体罰と不適切指導を両方経験していた者の割合は13.5%であったことが確認され, 体罰及び不適切指導に関する実態を把握する上で示唆を与える結果が得られた。

第一に, 被体罰経験率の高率性が示唆されたことに関して, 被経験の報告における社会的望ましきバイアスによる回答抑制の可能性(平田・小松, 2017)を踏まえて, 本研究では被体罰経験の有無をその程度や頻度に関わらず少しでも被経験がある, 則ち完全に未経験と回答した者を除き被体罰経験者と捉えた点にある。このことから先行調査(阿江, 2019; 平田・小松, 2017; 高橋・久米田, 2008)と比べて, 比較的高い割合が表出したと推察される。それに伴い, 調査対象者の体罰に対する意識及び評価によって被体罰経験を被経験と認知していない場合や体罰に対して肯定的意識を持つ者が被経験と判断していない場合等があることを思慮すると, 内田他(2020)が調査における体罰の多義性を考慮できていない可能性がある」と指摘するように, 体罰に係る調査では体罰の定義を明確に示す必要があると考えられる。その問題点に関しては, 調査冒頭及び質問文に本研究における定義を明記することで, 調査対象者の共通認識性をある程度確保できた点で実効性があり, それにより偏倚な知識に依存していた, 潜在していた被体罰経験の回答を採取できた一要因であるとも考えられる。また, 体罰の定義付けが各種研究で散漫であることを考慮すると, 体罰の事例等に関する具体性を含んだ操作的定義を調査実施時に提示し, 可能な限り体罰に対する認識を調整することが必要となると考えられる。そして, 統一化された定義を用いて調査を実施することによって, より有益な検討課題の獲得に寄与し得ると考えられる。本研究での限定的な結果ではあるが, 高校運動部における被体罰経験率が3割弱を占めていた現状は, 日本におけるスポーツ界及び教育界の危機的実態として明示的であり, 継続的に変遷を見取る資料を今後も積み重ね, 体罰根絶へ向けて警鐘を鳴らし続ける必要がある。重ねて, 近藤(2017)の指摘する実際の現場に入り込む観察型アプローチによるメカニズムの観点から探究する必要性を支持し, 実際の運動部の活動場面における調査介入の方法も検討課題としなければならない。

第二に, 被不適切指導経験に係る包括的資料が現状として乏しい中, 本研究でパワー・ハラスメントやセクシャル・ハラスメントといった不適切指導の実態を確認できたことは, 社会的意義のある一資料として重要な示唆を得られた点である。藤後・大橋・井梅(2017)は, 役割上の地位や競技レベル, 人間関係, 経済的状況など全てを含むスポーツの場における優位性を背景に行われる精神的・身体的・性的嫌がらせをスポーツ・ハラスメントと定義し, 有形力のある体罰に限らない多義的暴力の影響について法的根拠の観点から言及している。また, HRW(2020)の調査では, 25歳未満の調査対象者の内, 18%が過去に指導者から「言葉の暴力」としてあらゆる暴言を受けた経験があったことを示唆し, 実態に危惧を示している。そして, 藤後・大橋・井梅(2019)の研究では, 身体的体罰が減少している反面, 溜息や舌打ち等の被言語的攻撃, 怒鳴る等の言語的攻撃, 上手い選手を最良するといった関係性攻撃が指導にて行われている実態が明らかとされ, 可視化し難いハラスメントが連鎖する可能性を示唆している。さらに, 指導者のハラスメントは, 現在のストレス反応が重要な規定因となっている(藤後他, 2019)との指摘がされていることから, 今後将来的に指導者を目指す者の持つ内的葛藤やパーソナリティ特性と不適切指導との関連に焦点化した検証が必要になると考えられる。こうした先行研究と本結果を踏まえ, 体罰根絶という社会的認識の中で, 新たな形態の過度な指導としてあらゆるハラスメントが今後蔓延していく可能性を排除することは喫緊の課題であり, 本結果で被不適切指導経験者が2割程度存在していたことを踏まえると, 体罰の継続的な実態把握に加えて, 不適切指導の実態に関しても知見を蓄積し, 被体罰経験との関連性や理論的視点から不適切指導の起因構造を重層的に明らかにして

いく必要があると考えられる。

第三に、体罰に関する意識の実態については、肯定的意識を持つ被体罰経験者は10.3%、同じく肯定的意識を持つ被不適切指導経験者は7.7%存在しており、肯定的意識を持つ未経験者の割合は両被経験群と比較すると、被不適切指導経験者の方に多く見られた点である。体罰に対して肯定的意識を持つ者が総体的に見て2割弱と確認された現状は被経験率と同様、依然として逼迫した実態であると言える。両被経験に対する事後意識では、両被経験者とも総じて「精神的に強くなった」と体罰を肯定的に捉えていた被経験者が多かったことは興味深い点であり、「精神的に強くなった」及び「反抗心を持った」への回答が多かった大体連（2014）の調査結果を支持するものと考えられる。両被経験における当該指導者に対する現在の評価では、被体罰経験者の方が被不適切指導経験者よりもポジティブに評価している割合が高いという結果が示唆された。阿江（2019）によると、体罰を行使した当該指導者に対する評価を「全く尊敬できない」から「大変尊敬している」の5段階で尋ねた結果、尊敬している肯定的評価が7割を超えていた結果を示唆している。本調査での評価の尋ね方は異なるものの、当該指導者に対する評価は阿江（2019）の結果と比較すると減少していることが窺える。一方で、本調査でポジティブに評価している主観的認識割合が両被経験ともに一定数存在していたことを考慮すると、体罰及び不適切指導の再生産の可能性は否定できない。また、体罰に対して価値的意識の高い者は事後の認知や感情が肯定的になるという示唆（佐々木，2015）を踏まえ、今後は被経験者側の体罰及び不適切指導に対する評価意識の変容を促し、体罰と不適切指導との認知的評価の比較検討を行うことが必要であると考えられる。加えて、規範意識や精神力が体罰を伴うスポーツ指導によって獲得され、「体罰指導によって教育的効果が得られる」というメンタリティが世代間で継承される可能性がある（長谷川，2016）という言及にあるように、体罰の肯定的意識に係る課題解決に向けて、運動部の教育的価値を再考し、指導者と生徒の体罰及び不適切指導に対する両義的な意識の構成概念からアプローチする必要があると考えられる。

4. 2 体罰及び不適切指導が精神的回復力に及ぼす影響

高校運動部における体罰及び不適切指導、体罰是非意識と精神的回復力との差を検討した。その結果、有意差が認められた変数間の統計量の平均値から、各被経験において、被体罰経験群の方が体罰未経験群よりも感情調整得点が低く、被不適切指導経験群の方が不適切指導未経験群よりも感情調整得点及び肯定的な未来志向得点が低いことが示唆された。まず体罰及び不適切指導の両被経験群ともに未経験群よりも感情調整得点が低いことから、高校運動部における指導者からの体罰及び不適切指導を受けた者は、受けていない者と比較して自己の感情を制御する心理的特性が低くなると推察された。次に被不適切指導経験群が不適切指導未経験群よりも肯定的な未来志向得点が低いことから、指導者によるパワー・ハラスメントといった不適切指導を経験した者は、受けていない者と比較してポジティブな未来を予想し、将来に向けて努力しようとする心理的特性が低くなると推察された。体罰是非意識においては、体罰肯定群の方が否定群よりも感情調整得点が低いという結果が得られた。従って、体罰に対して肯定的意識を持つ者は、否定的意識を持つ者と比較して自己の感情を制御する心理的特性が低くなると推察された。これらの結果は、体罰及び不適切指導に関する実態及び意識と調査対象者の現在のレジリエンスに係る精神的回復力との関連を捉える上で貴重な示唆であると言える。

このことから、各被経験と体罰是非意識が精神的回復力に及ぼす影響を検証した結果、一定の新たな事実と先行研究を補完する示唆的な知見が得られた。第一に、被不適切指導経験において、被不適切指導経験群は肯定的な未来志向に有意な負の影響を与えていたことが明らかとなった点である。つまり、高校運動部における指導者からのパワー・ハラスメントといった不適切指導の被経験は、精神的回復力における建設的な将来設計や希望的な未来を展望できる肯定的な未来志向機能に対して、否定的に働くことを示したと解釈できる。阿江（2014）は体罰が子どもに及ぼす影響について考察している。運動部における長期的な暴力経験の及ぼす心的外傷として身体的不調や行動の萎縮、自己主張不能といった影響を挙げており（阿江，2014）、不適切指導においても類似した影響が推察されるが、先述の通り運動部における構造的暴力である不適切指導が精神的回復力に与える影響を検証した研究は見当たらず、その多義的影響は明らかにされていないため、不適切指導経験者が肯定的な未来志向できない傾向を示唆した本結果は、精神的苦痛を伴う過度な指導に関する問題提起の一助になり得ると考えられる。また、西坂・會田（2007）によると、指導者からの暴力経験がある者は、「悔しいと感じながらも、暴力行為を受けた原因は自分にあると考えていること、自己の精神面、技術面における成長を実感しており、指導者に対して感謝の念を抱く傾向がある」と考察している。このことを踏まえると、被不適切指導経験も同様、指導者に対する肯定的な感情を抱いている可能性は大いに推察されるため、今後検証を重ねる必要がある。そして尾見（2019）は、典型的な運動部集団の構造がハラスメントの温床となる可能性があるとし、不適切指導は「権力や権限を一方的に保有している立場の者が、その非対称の関係性に気付かないことから生じ易い」（尾見，2019，p.107）と述べている。不適切指導は可視化が困難な点が課題

ではあるが、運動部という所謂閉鎖的な社会で厳な権力構造が確立され、その中で指導者からの不適切指導を生徒が受けることで短期的なポジティブ展望が困難になり、中長期的にも肯定的な未来を描く機能が損なわれ、HRW (2020) が長期的な精神的影響を引き起こしかねないと言及していることを踏まえると、結果としてその影響が現在にも継続し肯定的な未来志向ができない心理的状态に及んだと考えられ、そうした構造化された負の意味付けが影響しているとも推察される。加えて、Vertommen, T., Kampen, J., Schipper-van Veldhoven, N., Uzieblo, K., & Van Den Eede, F. (2018) の研究によると、指導者からの身体的・性的・心理的暴力を経験した者は、心理的問題を抱えている可能性が示唆され、子ども期におけるハラスメント経験は成人期のメンタルヘルスとQOLを低下させるという負の関連性が明らかにされている。このことにより、不適切指導の心理的影響の一端を明らかにした本結果は、Vertommen, T. et al. (2018) の研究を補完する貴重な知見であったと考えられる。従って今後は、運動部における不適切指導に対する認識に関して、身体的暴力と不適切指導における指導者に対する評価の意識や影響の相違を検証し、不適切指導が及ぼす心理的影響をより多面的に明らかにする必要があると考えられる。

第二に、体罰に対する是非意識において、体罰肯定群は感情調整に有意な負の影響を与えていたことが明らかとなった点である。つまり、高校運動部に所属していた者の体罰に対する肯定的意識は、精神的回復力における自己の内的感情状態を制御及び維持できる感情調整機能に対して、否定的に働くことを示したと解釈できる。このことについては、態度構造の理論に代表されるFestinger (1957) が提唱した認知的不協和理論で捉えることができると考えられる。大石・笹生 (2016) は、体罰受容と正当化のメカニズムについて認知的不協和理論を援用して考察し、体罰の再生産性を言及している。本結果においては多少様相が異なるが、認知的不協和の観点から体罰に対する是非意識を考察している先行研究 (阿江, 2019; 尾見, 2019; 大石・笹生, 2016) を補完する結果だと言える。そもそも、認知的不協和理論の認知的不協和とは、人間は異なる2つの矛盾する意見や信念、価値が同時に生じている際に感じる不快感、即ち不協和を指し (尾見, 2019)、その不協和に対して無矛盾性又は適合性を確立しようとする (Festinger, 1957)。そこでこの不協和状態を回避しようと認知的要素の一方を変化させたり、協和的な新たな認知的要素を加えたりすることで、不協和状態を解消し、協和的な認知へと正当化しようとするという社会心理学における理論である。本結果をこの理論に基づいて考察すると、本調査対象者は体罰という社会現象そのものに対して不協和を捉えていると推測し、認知1として、「指導者による体罰は必要だ、時と場合によって必要な場合がある」といった肯定的意識、認知2としては、「指導者による体罰は絶対にあってはならない」といった否定的意識がこれに相当する。本調査対象者はこの2つの認知の間に矛盾する不協和状態を覚え、その認知的不協和から回避するために、「体罰を受けて育った選手は良い成績を残している」といった勝利至上主義的な価値観、「精神的に強くなっている、忍耐力を獲得できる、気合いが入る」といった根性主義的な価値観などが複雑に媒介し、認知1である肯定的意識の重要性を増大させ捉えることによって正当化を促し、不協和状態を解消したのではないかと考えられる。しかし、本結果で示された通り、体罰を肯定的に捉える者は、感情を制御し、コントロールする感情調整ができず、感情調整機能に対して否定的な影響を及ぼすことが示唆されているため、実際にレジリエンス概念における回避困難な脅威的状况においては、上述したような回避及び正当化を原説とした場合には、体罰に対する肯定的意識は感情調整に対して否定的に作用し、正の影響は獲得し難いと推察される。従って、不協和状態からの正当化の媒介として予測された勝利至上主義的な価値観や根性主義的な価値観といった要素は、一時的な不協和解消に留まり、長期的に見てその肯定的意識と認知的要素が現在の感情調整の能力を低下させていたと解釈ができる。また、精神的な柔軟性や弾力性を反映し得る精神的回復力は個人のメンタルヘルスに大きく左右し (小塩他, 2002)、中でも感情を制御し、調整するという心理的特性は、今後運動部やあらゆるスポーツ指導場面において必要不可欠な資質であると推察される。

「ついカッとなって手が出てしまった」、「指導しているうちに怒りが増し、つい暴言を放ってしまった」といった衝動性を伴う指導者の言葉をよく見聞きする。こうした行為の背景には当人の内的感情や自己内葛藤、そして、感情調整が体罰や不適切指導行使の一要因として大きく影響し、体罰や不適切指導の再生産性を助長する結果をもたらすとも考えられる。

4. 3 本研究の成果と今後の課題

本研究において、高校運動部における被体罰経験及び被不適切指導経験と体罰に関する意識を把握し、それらがレジリエンスに係る心理的特性である精神的回復力に及ぼす影響の一端を明らかにできたことは、継続的に変遷を見取る補完的知見として有益な結果であるとともに、体罰及び不適切指導における負の功罪を検討する上で一定の成果を挙げることができたと考えられる。しかし、本研究では調査対象者の肯定的意識を持つ被経験者との差異や事後意識の実態などを含めた複合的な要因から精神的回復力との関連性は明らかにできなかった。また、これまでに心理的特性から体罰及び不適切指導にアプローチした実証的研究は乏しいため、比較検討の材料は少ない。及ぼされる心理的

影響を競技レベルや活動環境といった他要因との関連についても検証を重ねていくことが望まれる。そして、実態把握の検証も同様、体罰及び不適切指導の被経験者のサンプル数は限定的であるため、今後調査サンプル数を増やし重層的に検討する必要があると推察される。加えて、本結果で得られた体罰の是非意識が及ぼす心理的影響を認知的不協和理論に即して考察したが、限定的な本結果だけで十分な説明力があるとは言い難いため、実際に理論的概念における認知の変容等が生じているのか等を多面的に測定し、心理的影響をより深く追究するためさらなる検討が必要と考えられる。

5 謝辞

本研究に際して、調査の実施に快くご協力いただきました学生の皆様に、心より感謝申し上げます。また、本研究を進めるにあたり、上越教育大学（専門職学位課程）の星洗貴さん、同課程の吉村憲治さんにご協力を賜りました。ここに感謝の意を表します。

6 引用文献

- 阿江 美恵子 (2014). 運動部活動における体罰が子どもに及ぼす影響. 体育科教育学研究, 30(1), 63-67.
- 阿江 美恵子 (2019). 教育における体罰禁止通達後3か年にわたる運動部での体罰の現状と体罰禁止教育の効果. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 54, 1-10.
- American Psychological Association (2012). *Building your resilience*, Date created 2012. <https://www.apa.org/topics/resilience>. (2021年1月18日参照)
- Festinger, L. (1957). *A THEORY OF COGNITIVE DISSONANCE*. Row, Peterson. 末永俊郎 (藍訳) (1965). 認知的不協和の理論——社会心理学序説——. 誠信書房.
- Global Initiative to End All Corporal Punishment of Children (2016). "*Corporal punishment of children: review of research on its impact and associations*", Working paper, June 2016. <http://endcorporalpunishment.org/wp-content/uploads/research/Research-effects-review-2016-06.pdf>. (2020年11月25日参照)
- 長谷川 誠 (2016). 学校運動部活動における「体罰」問題に関する研究：体罰を肯定する意識に着目して. 神戸松蔭女子学院大学研究紀要, 人間科学部篇, 5, 21-34.
- 平田 忠, 小松 恵一 (2017). 高校の部活動における体罰経験と体罰に対する評価をめぐって——仙台大学の場合と他大学による調査との比較研究——. 仙台大学紀要, 48, 23-36.
- HUMAN RIGHTS WATCH (2020). 『数えきれないほど叩かれて』, 日本のスポーツにおける子どもの虐待. "*I Was Hit So Many Times I Can't Count': Abuse of Child Athletes in Japan*", 翻訳版報告書. (2020年11月25日参照)
- 今宿 裕, 朝倉 雅史, 作野 誠一, 嶋崎 雅規 (2019). 学校運動部活動の効果に関する研究の変遷と課題. 体育学研究, 64(1), 1-20.
- 葛西 真記子, 石川 八重子 (2014). 高校生のスポーツ活動とレジリエンスの関連について. 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 28, 1-10.
- 近藤 龍彰 (2017). 体罰研究の近年の動向と今後の課題. 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 教育実践研究, 12, 1-6.
- 松田 太希 (2016). 運動部活動における体罰の意味論. 体育学研究, 61, 407-420.
- 宮坂 敏一, 藤田 圭一, 市川 優一郎 (2018). 体育専攻学生における体罰意識の本質を探る——テキストマイニングによる体罰意識の分析——. 日本体育大学紀要, 47(2), 207-216.
- 文部科学省 (2017). 「スポーツ基本計画」, 第3章：今後5年間に総合的かつ計画的に取り組む施策. pp.7-30. https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002.pdf. (2021年1月11日参照)
- 日本体育協会・日本オリンピック委員会・日本障害者スポーツ連盟・全国高等学校体育連盟・日本中学校体育連盟 (2013). 「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」. <https://www.joc.or.jp/sp/news/detail.html?id=2947>. (2021年1月17日参照)
- 西坂 珠美, 會田 宏 (2007). 高等学校のクラブ活動における指導者の暴力行為. 武庫川女子大学紀要, 人文・社会科学篇, 55, 149-157.
- 大峰 光博 (2016). 運動部活動における生徒の体罰受容の問題性：エーリッヒ・フロムの権威論を手掛かりとして. 体育学研究, 61, 629-637.
- 尾見 康博 (2019). 日本の部活 (BUKATSU) ——文化と心理・行動を読み解く. ちとせプレス.
- 大石 千歳, 笹生 心太 (2016). 高等学校運動部での体罰経験の解釈と体罰再生産メカニズムの関連性の検討：認知的不協和理論による体罰の正当化および集団凝集性の観点からの体罰のチームワーク強化機能について. 東京女子体育大学女子体育研究所所報, 10, 49-57.

- 小塩 真司, 中谷 素之, 金子 一史, 長峰 伸治 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性——精神的回復力尺度の作成——. カウンセリング研究, 35, 57-65.
- 坂本 拓弥 (2011). 運動部活動における身体性——体罰の継続性に着目して——. 体育・スポーツ哲学研究, 33(2), 63-73.
- 佐々木 万丈 (2015). 女子高校生スポーツ競技者への指導者による体罰の実態. スポーツとジェンダー研究, 13, 6-23.
- 産経新聞社 (2020). 「兵庫・宝塚の柔道部顧問, 傷害罪で起訴」. 産経ニュース. <https://www.sankei.com/west/news/201102/wst2011020038-n1.html>. (2020年11月17日参照)
- 山陽新聞社 (2020). 「卓球部顧問の教諭が体罰や暴言 山陽学園中・高, 減給処分に」. 山陽新聞digital. <https://www.sanyonews.jp/article/1071052>. (2020年11月17日参照)
- 佐藤 暁子, 金井 篤子 (2017). レジリエンス研究の動向・課題・展望——変化するレジリエンス概念の活用に向けて——. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学, 64, 111-117.
- スポーツ庁 (2018). 「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン (平成30年3月)」. pp.17-20. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/03/19/1402624_1.pdf. (2020年11月4日参照)
- 高橋 豪仁, 久米田 恵 (2008). 学校運動部活動における体罰に関する調査研究. 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 17, 161-170.
- 藤後 悦子, 井梅 由美子, 大橋 恵 (2015). スポーツにおけるポジティブ体験・ネガティブ体験とスポーツ・ハラスメント容認志向. 東京未来大学研究紀要, 8, 93-103.
- 藤後 悦子, 大橋 恵, 井梅 由美子 (2017). 子どものスポーツにおけるスポーツ・ハラスメントとは. 東京未来大学研究紀要, 12, 63-73.
- 藤後 悦子, 大橋 恵, 井梅 由美子 (2019). 過去のスポーツ体験及び現在の指導・日常生活体験が地域スポーツ指導者のハラスメント行動に与える影響. モチベーション研究: モチベーション研究所報告書, 8, 11-22.
- 東京都教育委員会 (2019). 「生徒のバランスのとれた心身の成長や学校生活に向けて——部活動に関する総合的なガイドライン——」. 第3章: 体罰, 不適切な行為の防止. pp.34-49. https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/press/press_release/2019/files/release20190725_02/book.pdf. (2020年10月31日参照)
- 友添 秀則 (2016). 運動部活動の理論と実践. 友添 秀則 (編), 第1章-1: これから求められる運動部活動とは pp.2-15. 大修館書店.
- 戸山 彩奈, 松本 裕史, 渋谷 崇行, 幸野 邦男 (2020). スポーツ指導者の統制的行動が女子大学スポーツ選手の動機づけに及ぼす影響. スポーツ心理学研究, 47(1), 1-11.
- 上野 耕平 (2013). 運動部活動及び学校生活場面における心理的スキルと生徒の競技能力及び精神的回復力との関係. スポーツ教育学研究, 33(1), 1-13.
- 内田 遼介, 寺口 司, 大工 泰裕 (2020). 運動部活動場面での被体罰経験が体罰への容認的態度に及ぼす影響. 心理学研究, 91(1), 1-11.
- Tine Vertommen, Jarl Kampen, Nicolette Schipper-van Veldhoven, Kasia Uzieblo, Filip Van Den Eede (2018). Severe interpersonal violence against children in sport: Associated mental health problems and quality of life in adulthood. *Child Abuse & Neglect*, 76, 459-468.
- 全国大学体育連合 (2014). 「運動部活動等における体罰・暴力に関する調査報告書」. pp.4-16. <https://daitairen.or.jp/2013/wp-content/uploads/2015/01/f2cb4f9e1c5f5e1021e44042438f44ab.pdf>. (2021年1月17日参照)

APPENDIX

調査内容項目 (一部抜粋)

- ・あなたは、高校の部活動で指導者による体罰を経験しましたか？
- ・あなたは、指導者による体罰を受けたその後、「精神的に強くなった」と感じましたか？
- ・あなたに体罰を行使した指導者に対する現在の評価を教えてください
- ・あなたは、高校の部活動で指導者による不適切指導を少しでも経験したことがありますか？
- ・あなたは、高校の部活動で指導者による「パワー・ハラスメント等の脅し, 威圧・威嚇の発言や行為」を経験しましたか？
- ・あなたは、指導者による不適切指導を受けたその後、「反抗心を持った」と感じましたか？
- ・あなたに不適切指導を行使した指導者に対する現在の評価を教えてください
- ・あなたは、部活動において指導者による体罰が必要だと思いますか？

精神的回復力尺度 (Rは逆転項目)

新奇性追求

- ・色々なことにチャレンジするのが好きだ
- ・新しいことや珍しいことが好きだ
- ・ものごとに対する興味や関心が強い方だ
- ・私は色々なことを知りたいと思う
- ・困難があっても、それは人生にとって価値あるものだと思う
- ・慣れないことをするのは好きではない (R)

- ・新しいことをやり始めるのは面倒だ (R)

感情調整

- ・自分の感情をコントロールできる方だ
- ・動揺しても、自分を落ち着かせることができる
- ・いつも冷静でいられるよう心掛けている
- ・粘り強い人間だと思う
- ・気分転換がうまくできない方だ (R)
- ・つらい出来事があると耐えられない (R)
- ・その日の気分によって行動が左右されやすい (R)
- ・飽きっぽい方だと思う (R)
- ・怒りを感じると抑えられなくなる (R)

肯定的な未来志向

- ・自分の未来にはきっと良いことがあると思う
- ・将来の見通しは明るいと思う
- ・自分の将来に希望を持っている
- ・自分には将来の目標がある
- ・自分の目標のために努力している

The Effect of Corporal Punishment and Inappropriate Coaching on Resilience in High School Athletic Club Activities

Hayato TOYODA* · Tomoyuki YAMADA** · Shun IIZUKA*** · Toshiro ENDO***

ABSTRACT

Corporal punishment and inappropriate coaching during athletic club activities are deeply rooted social problems. The present study conducted a retrospective survey with university students to examine the conditions associated with corporal punishment and inappropriate coaching in high school athletic club activities. The survey investigated the effects of corporal punishment and inappropriate coaching as well as the positive and negative consciousness of corporal punishment on resilience. The results indicated that 27.1% of the participants experienced corporal punishment, 20.6% experienced inappropriate coaching, and 13.5% experienced both. Of participants, 18.1% had a positive consciousness of corporal punishment; among them, 10.3% experienced corporal punishment, and 7.7% experienced inappropriate coaching. Multiple regression analysis using stepwise methods was conducted between the group that experienced both corporal punishment and inappropriate coaching and another group with positive perceptions of corporal punishment as independent variables; resilience subscale scores were dependent variables. The results indicated that inappropriate coaching had a significant negative effect on one's positive future orientation, suggesting psychological effects. Moreover, the positive perception of corporal punishment had a significant negative effect on emotional regulation, suggesting that positive consciousness of corporal punishment might promote the reuse of corporal punishment and inappropriate coaching.

KEY WORDS : corporal punishment, inappropriate coaching, harassment, resilience

* Joetsu University of Education (Professional Degree Program) ** School Education ***Yamanashi Gakuin University